

通航一覽

七

庫	文	閣	内
一 七 八 函	二 大 冊	三 五 三 八 一 號	和 書 類

139
閣

内閣文庫	
番號	和 35381
冊數	26 (7)
函號	178 444

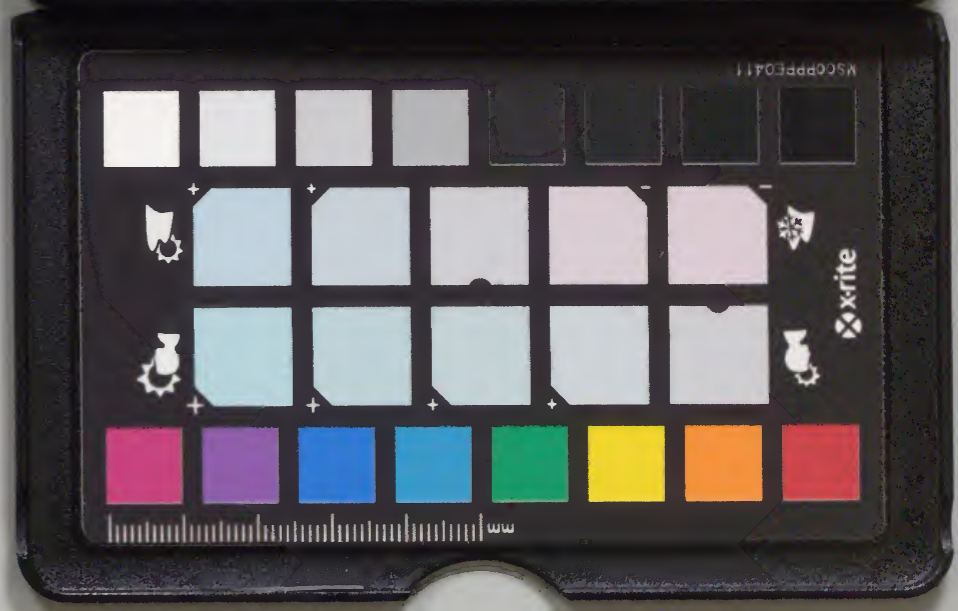
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

G
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



陶 129

漢代

陶器

目錄

一、前言

通航一覽卷之七

琉球國部七

目錄

一 來頁

寬文十一年

通航一覽卷之七

琉球國部七

素貞 寛文十一年



寛文九己酉年七月十日松平 為清

少将光久より中山王の禮装封を

伺い舊儀より任じしと云ふ命せしむる 前王 尚質

去年辛巳世子尚貞ことしに列装封あり但し前冊に載るこ
と中山王辛巳の儀津氏より先づ禮装封と命しし後
と云ふと云ふ事舊儀のしなり然るも此時禮装封と
伺いしにいさむる事ありしや前記の如く文に云ふに

寛文九己酉年七月十日琉球王病死舟中例

相續々々自松平大隅より十月廿二日越老中

と大隅より相向するに上関一夜舊例より此例

人見社祀

為天日録

同十一年亥年七月琉球人糸府より

つまむる造り及びいり路り作法火の元号

の所福あり同月亦一日江戸より糸府に

同亦六日松平 為博 少将光久の許より使

を以て米二千俵と賜ふ

寛文十一年亥年七月

一 近日琉球人苗地に糸府より道筋一町

と道を造り無事なるを砂を入つくりて中

を掃揚せしめりてふとよとよと造りて中

は今の元出と成り隣町と中合ふとよ

早と造りて中い少と造りて中い少と

七月

寛文十一年七月廿日

覺

一 明正日琉球人逐出當此の条省仕の所町中
 不化法云々此急方一付の鬼物仕の者共
 云々一付の所一付の所琉球人逐りし利
 い一付の所一付の所仕の者共

一 水打の桶面の家一付の所一付の所一付の所
 一 並掃除云

油刺仕琉球人通りし一付の所一付の所一付の所

一 琉球人逐りし利名全一付の所一付の所一付の所

一 付の所不化法云々此急方一付の所一付の所一付の所

一 主木戸の附居仕の所一付の所一付の所一付の所

一 付の所

一 琉球人登 城之日亦一付の所一付の所一付の所

按てに増上寺系治の事一付の所一付の所一付の所
 見ふ一付の所一付の所一付の所一付の所
 此のり一付の所一付の所一付の所一付の所
 享保一付の所一付の所一付の所一付の所
 次一付の所

元世皇... 為同封事

一琉球人系府之日より... 付奉

附り所中水漏桶水汲込... 早くかき集り消し...

亥七月

右七月廿日福福町中名至月の奉...

出...

正室奉録
大成令

寛文十一年七月廿一日琉球人奉...

金武王子

越来親方

垣本親雲上

福福親雲上

津波古親雲上

前田親雲上

宇良親雲上

川頭親雲上

令城親雲上

平安山親雲上

伊針親雲上

新川親雲上

保栄茂里主

大城里子

思次郎

松葉

太郎葉

真三郎

右十八人樂人じら持者よ十四人旗将口人道

具二人並持者人下人三十二人初合七十日人未約

寛文十一年七月廿八日晴

一 從琉球國中山王尚貞為總司正統使者令武
王子酒々尚地松平大隅守卜左衛門正統曾
外忠為正統令正統使者

一 琉球國中山王使者令武王子松平大隅守正

統使者
按より今分の幸福門
内中左衛門正統 今約系正統其より

比正統口正よりやより正統正統正統正統

正統
按より今分の幸福門
内中左衛門正統 板倉因幡正統其より

より大隅守正統正統正統正統正統正統

大正正統正統正統正統正統正統正統

列考松平大隅守正統

但道番正統正統正統正統正統正統正統

正統正統正統正統正統正統正統正統

正統正統正統正統正統正統正統正統

正統正統正統正統正統正統正統正統

一 今武王子屋簀之系後者十七人騎馬大子之
先之而下今武王子也也隨今武王子事
系物摺之有之屋簀より下系任旗持并持
等其外之役人大子之腰掛也也
一 騎馬指七人之族別謂

越來親雲上
宇良親雲上
川頭親雲上

令城親雲上
垣元親雲上
平安山親雲上
真井田親雲上
稻福親雲上
津波古親雲上
伊計親雲上
新川親雲上

樂人以取小性文人

保榮茂里子

大城里子

思次郎

太郎兼

松兼

真三郎

何者樂人也

右一分登城殿上弓之何公所目見云々

一令武王子出玄園階云々至時大目舟高木

伊勢与大目舟渡与古向云々案内殿云々間

卜檀名産後者拾七人同不次云々列在右安

之族云々出玄園前庭云々云々

一松平大隅与松平修理大夫奉勵云々弓名

産

但松平薩摩云々

按此乃小松久と称し光久の
嫡子云々云々松平の父云々

在國也

一 中山王より老中へ来書翰高木伊勢守

大國使酒子清田之出歩引目舟引入

神禮之次第

一 已后利大廣間出河出長袴刀之板封

自江所常
東性亮也 上檀 自江厚之之重以唐織包之曰
之角之大総舟之由禱出刀判有之 伊

高座清後之奉多士代子之石川英他子酒井

之之波子之列候 自江由小性組之番取也
平世於伊也習奉仕

松平右京大夫

松平出羽守

松平英他守

一 西之方板撮

古之人振之意禮儀并伊掃部以松平漢波守

之在所保神流者守之忌中向出座守

一 日品以下中大名由藩代大名全友之由之

不涉出次男禮也

但國持大名甲泉以上出仕也

一 西次之弓南之板椽酒井雅樂隊稻葉次法

弓久世大和弓士左但馬守板倉内膳正 攝正

大光次儀正列大和弓廣之但馬守教生内膳正重矩光中分り 列作

一 金武王子殿上之同より大廣弓士高木伊

勢守大是依清守之案内中より弓士

安后際之福と白け左座松平大隅守松平

修理大吏列座

一 大隅守修理大夫之人死下後妻在之内有清

目之退去之後雅樂隊次法清守清守と此の如

く金武王子可出席之右法作出台命之御

大隅守之旨由人深生

一 從玩球國王尚貞不献之思之出清守より

南之板椽東角より湯目通之順之並進之

清守刀

去之腰

弓馬代

白銀云信枚

大卓

自派是塗書
見流全

二

九中央卓

自注青貝
二朱塗二

数日

按より玉衣叢より中央九卓二本柱二面
堆朱青貝但窓扇形被青貝とあり

龜飯

自注
青貝

二

按より小同書より亀飯一
對青貝梅の形枝とあり

綾芭蕉布

又指端

薄芭蕉布

同

太平布

百疋

久米綿

百抱

泡盛酒

又壺

布通欵々々湯布刀目錄奏者番小笠原
山城守清取々湯井河内守湯々中辰下
より二魚目三魚々中山王よりと被家
々令武王子史席下辰下より史魚目々
又漆る列退座湯布刀目錄同人引入々終
る西納戸梅々内々入洋

一 並座を物方湯務子々方々引入々各物番

之半没之之後令武王子自分之玉物持
出清目通より少毎の寄る並出之

官香 拾包

香餅香 五箇

練芭蕉布 十端

綾芭蕉布 同

泡盛酒 二壺

但古玉物出清以前より車寄之際迄之其

有りり運出之

一 從西納戶橋出河上辰山急座令武王子出席
於板塚寺云云奏者番松平山城之被寄

河次之間に退去

一 大隅守中辰之此古玉物云云有り之河次之方は
退去之河次樂以兵濃守河前之此古玉物
令武王子遠境に裁辛勞に思ふ自由所從有
之退去大隅守に述之大隅守傳る事令武

王子と源述と平為入河出逃均引入一火
隅と修理大吏退去

一 今武王子依伊勢与信濃与之各各殿之
男は同列下禮也一平時礼樂以安民也
和与保子与月信正和誠令秋令武王子令
秋有之制退去以後伊勢与信濃与之不知
今武王子退却者多人由云國階之云云是
也從者十七人順之退出但老中一人退去

一 右大下馬と和誠と由波子と時清大名
之外一箇一箇之退出也

今日出度殿在正城中不之知也

一 殿上間之次一基子儀一由打寄在坊之一人
有之

一 大廣間出納戸據之故一由使役初仕

一 由小性組由書院番出八千人由書院由番所
由番と和加初番何者軍務也

一 大田番主人百人 大廣門より一里一里を居居際より

二里二里除く北より方と並居居初番生袴也

但今日出仕し面々長袴也

一 少左衛門中山舟き人 右右右右門初仕

一 藤重中山加番

水野小左衛門

一 中山門加番

依田内苑助

一 山屋新口中山加番

河野源右衛門

按より上は小左衛門の先手取
内苑助源右衛門の同族也

一 系物揚中山舟一人

河口源左衛門

按より上は此等番中
舟り舟と云ふなり

一 少左衛門市より中山門に延ぶる

一 今日出仕し面々系物揚大目より方除く内

橋田し腰掛より南に並

一 今武王子屋簀より系物揚し張番市に際

に並

一 龍口より板倉内給正番と相織出仕し面

と和同舍福より内務田出つ可お毎々分業
るよりお福

一 蓮池少門開し出仕し毎々お毎々

一 今武王子より琉球人より人者尋常上不出

也 按さる小柳菅日記より此下より
上段より上七十六人より申あり

一 今日例月より後西後々

琉球人末朝記
柳菅日記

中山王右書管字

欽奉呈一封候抑去歳吾薩州之太守
光久奉

台命而令予嗣琉球國主之爵位因茲為
奉述祝詞使小臣金武王子附于光久
獻上鄙國之方物候伏冀以尊大老之
指揮所可達

上聽奉仰候誠惶謹言

中山王

寛文十庚戌年五月廿五日

尚貞判

進上

酒井雅樂頭殿

謹令呈上一翰候抑去歲吾薩州之太
守光久奉

鈞命而令予嗣琉球國王之爵位因茲為
奉述賀詞使小臣金武王子附于光久
獻上不腆之土宜候伏冀以諸大老之

指南可達

台聽儀所仰候誠惶不宣

中山王

寬文十庚戌年五月廿五日 尚貞判

進上

板倉内膳正殿

土屋但馬守殿

久世大和守殿

稻葉美濃守殿

慶延畧記 玉露叢
三才雜錄

寛文十一年七月廿八日琉球人云半時迄城守

半時迄退去

此記方為年記

七月廿九日琉球人老中若年為

乃宅よまいつる 此奉りしめくつらむ此時より八月

七日修理大支尾貴全武王子と携り

東叡山

市宮よ系洋〜〜古刀目録と執

備は時よ道筋致云東山内市初番

番あり 此時より日光登山の事や心系洋の

今日小 日〜〜め又日と定め〜〜るあり〜

寛文十一年七月廿九日

一琉球人老中若年為井伊掃部

氏松平侯他方

按しつる小侯他方定房此は天西苗
守居〜〜りて藏之孫十四年より

廢
以
五
載
由

柳
營
日
次
記

寛
文
十
一
年

一
八
月
五
日
琉
球
人
上
野

所
宮
上
系
指
舟
彼
池
也
番
販
賣
高
木
皆
在
是
所

但
助
大
森
半
七
郎
斤
類
指
又
人
如
例
上
下
三
名

又
半
三
指
山
根
舟
日
大
森
半
七
郎
舟
福
三

一
八
月
七
日
琉
球
人
上
野
上
系
指
舟
彼
池
也

所
宮
也
番
販
賣
大
森
半
七
郎
斤
類
指
又
人
如
例
上
下
三
名

舟
山

但
希
條
又
日
一
市
琉
球
人
上
野

所
宮
系
指
舟
彼
池
也
番
販
賣
日
福
三
名

又
又
又
日
一
市
琉
球
人
上
野

日
後
方
為
年
記

寛
文
十
一
年
八
月
七
日

一
東
廠
正

淨宮に琉球國使者糸指舟る道筋を敷く
可く勅書に抄す

一筋遠指より番丹波を左方と面く只
出く道筋を敷く但増し寺より筋遠
指と所通す町を引下付く

一卜谷山歩行町より黒門と敷云固

一黒門より二王門と
柵系能く助
永井右左衛門

一二王門より惣門と
安後對馬寺

一惣門より
小笠原山城寺

一淨宮内
柵系大指
無大

按より小右邊を對馬寺ハ山奏者番
山城寺ハ寺社在り大指ハ山佐次郎

古く通筋仕

一辰下判

淨宮に琉球國使者令武王子糸指惣門より
左橋より下系陽明門と内と大是作所と

出向先達より令武彼後とて案内とて後中山
王御とて一冊とて刀目録並書帳より一冊並後
一冊とて彼後令武五部とて一冊別選書

但松平修理大進事令武とて同道彼後と

介とて一冊北とて一方小笠原山城とて戸田

伊賀守梅とて一冊
寺社事永井右近大進安房尉馬

守並西目付是部左近とて自取厚
書安之

一令武王子後者徳とて一冊大隅守中付と

但於東殿山後とて後とて一冊謂

一 二王門外とて一旗持鋒持と外と一冊と後

人相載事

一 惣門とて一冊とて於沙本丸系物揚とて一冊

と族と相載事

一 石とて一冊とて一冊とて西本丸西玄室とて相

列庭とて一冊とて一冊とて相載事

一 隨身門とて一冊とて一冊馬十七人とて一冊相載事

按之に奥日記より隨身門内伺公々々米松年修程之史
永井右之丞史小多系心城より戸田伊賀守安反討る事と
あ
り

右之通系日記より西下知也

市日記

琉球人來朝記

寛文十一年八月七日琉球国王使者来殿正

市宮に系洋但日光に系宿舎

琉球来朝日記抄 ○按ずる小如右日簿抄

山本氏業記より日光系系洋とあり誤りあり

八月八日大老酒井雅樂氏忠清の宅

よといひ琉球人よ音楽と命せらる

此時

巖有院殿の酒所及び法役人徳圃等の奉洋ありはる
桃竹の宅より命せらる
奉是より後絶くす
同九日琉球使登城

市所賜物あり法奉一何のこと

寛文十一年八月八日於酒井雅樂氏宅琉球

人よ法作舟樂々番付

一樂云り

大平樂

何歳か下りて登城し可成由申す

一 明日辰先日通万番并下物申す
但書一申す此は通万番書と申す
申す

道番

奉多平右衛門

安房守右衛門

安房守右衛門

右之但先例通相初は此は通万番書

下物引

一 明日午坂下申す印系山下申す

一 此後高下申す并奉番申す供番助申す

下りて出申す此は通万番書相初

同月九日

一 五半時迄琉球人登城下物中山王に

送下物把合武王子に時辰十浪武右

浪三右夜也道番平右衛門傳右衛門

琉球人下物引役治右衛門組長

廣間由縁より西玄園より西縁より子長
仕也

正徳方善年記

寛文十一年八月九日

一琉球國中山王使者令武王子今日西帳可也
下之方就永作出松平大隅守屋敷より辰
后刻登城道筋并從者より行列先月廿八日為
西控如出仕云云

一令武王子於紫物指屋橋より下歩初也也
玄園來時階より板椽より高木伊勢守大目長
徳酒守出向より菅野殿より向下辰並に提
者より半同次より下守より族より西玄園より首
庭より居也
一松平大隅守同修程大吏登管是亦殿より方
下辰より座より座
一今日より依云出陣由廣守より弓雅樂隊出陣

与大和与但子内后正少一方西後隆子際
より東一方は順に列座平時似平大隅与同
修理大吏先坐る右一方席南一方は北座
于後伊勢与信濃与と案内厨と一方より
令武王子大廣与中一方安后際西に向る
左座對空中央一禮會款有る令武安后
一方北座座此時中山王と云ふと飽美白銀
五百枚綿五百把と云ふと方雅樂以傳と

但令武出座以右より右一方白銀綿大廣
間下座並座と西後隆子前方より明座
一方令武王子座と坐る伊勢与信濃与有
一方坐る大廣間北一方座安后一方は令
武退座西後隆子圍と
一此内令武と座下白銀二百枚并時服十西一方
縁より持おと大廣間中一方安后と坐る
隔る中央より東一方は安后と坐るを物番

忌長袴役々々令武伊勢与德波与々々馬
利令武出座の中々写中央之座此中白
根时彼下々々台席之通次流与傳々々洋
交平与伊勢与德波与令武王子松
之間は退步砌右々々下物車与一方は進
物番々々半門々々

一 右平令武役者々々族々下々々白根二百
枚爲々口縁より物中々間东々方表居際

二 此々々物番役々々此时令武中央之出座白
根役者想中々下々々物車与傳々々令武
一 禮有々々松々間は退步下物車与一方は
引々終る重与令武之手中々写次居際
高一礼大隅与修理大史着出座也終る者
殿々々写退去

一 於殿々々間琉球中山王々々下根子綿出
々目録并流雅樂以々返寄伊勢与持系令

武之酒一次自卷中一返籍一修酒一与持系令
武之酒一

一 古之与今武退去卷中思送之伊勢与
修酒与武玄因階一予之思送也

一 大隅与修理大吏大廣间一伊勢与修酒与
誘引出座有一る湯卷中琉球人西眼号一

武之述一事一年

一 高家元治元一中一与南一与方一方一居一際一初

より东之方一云一庭

一 奏者番元一与守一在元大西番一以西書院番
以西小性組番一以新番一以之并没人物一以
南之西縁箱方一より西車方一と並一也

一 西小性組西書院番一より西人四十人一之長袴
西書院番一不一番一加初番一

一 大西番元百人一之赤松一与列居半袴

一 西安河元肩衣袴
按之るに麻と下
乃得るふと一 名一与一

此下物由東去より西玄園と行くと松平大陽
寺家来は海々

一外候々大名出仕々々

一不々由々番加々々々書付由同付中々々

有不記々々

一琉球中心王に雅樂以老中より返寄々々奉

思々々

琉球人素朝記
事日記

酒井雅樂以老中返寄

使者金武遙来芳墨入手欣然不淺抑琉
球國可被傳續之旨去年從薩摩國守光
久就申達之為安堵之慶賀而進獻土產

如目錄使者持參登

城即遂披露奉備

上覽之處被召使者於

御前奉拜謁畢

御氣色快然可謂幸也莫勞遠想猶使者
可演說者也不宜

寬文十一年八月九日

從四品將兼雅樂頭源朝瀨

回答中山王

館前

使价金武來貢芳簡披閱面話惟同抑去
年從薩州太守光久就申達琉球國傳封

之儀為安堵之賀儀被進獻土宜件件使
者捧之登營如數披露之奉備
台覽之處使者被召出而奉拜

御前

御氣色殊宜幸甚幸甚可被安遠懷猶示
諭使者畢不宜

寬文十一年八月九日

從四品侍從兼內膳源朝重矩

從四品侍從兼御守源朝數直

從四品侍從兼大和源朝廣之

從四品侍從兼美濃越智繼則

回報中山王

館前

慶延畧記 玉露叢

三才雜錄

八月十九日琉球人江戸と發し同亦
七日伊勢の國桑名より洋中より

新風より遭ふ事と源を以てし
一海をあり

寛文十一年八月十九日琉球人今日西田地
只之舟中番亦名くは福也

正室事録

寛文十一年九月三日琉球人五月廿六日
徳田より一船仕立七月より船名名海船
知口文里番新風より琉球人乗中三艘
内一艘

桑名と志摩武艘と尾州知多郡之内多原村
大野村と村と吹舟と外京中の船口指九艘之内
又艘知多郡之内森村小條村と志中の一艘ハ志
別若松と志中の琉球人並松平大隅の家来お遠
子之由源と

御景目次記 浮海集
玉滴院見武門院説拾遺

同十二壬子年一五年系府口使者
帰國の由程とて中山王尚貞と

里薩摩より献物ありとて九月十五
日少将光久よりこれと持く
澄ハ薩摩國来
貢北條より



